

文芸雑誌『クラルテ』創刊号研究*

－小林多喜二の作品を中心に－

金大洋**
daeyang76@hanmail.net

＜目次＞

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. 創刊号『クラルテ』と小林多喜二 |
| 2. 先行研究 | 5. おわりに |
| 3. クラルテ運動と小林多喜二 | |

主題語: 創刊号『クラルテ』(The first issue 『Clar-te』), クラルテ運動(Clar-te movement), 小林多喜二(Kobayashi Takiji), アンリ・バルビュス(Henri Barbusse), プロ文学(Proletarian literature)

1. はじめに

本研究は北海道の小樽で発行された文芸雑誌『クラルテ』の創刊号と創刊号に掲載された同人の小林多喜二(1903-1933、以下 多喜二)の作品を中心に見ていきたい。

文芸雑誌『クラルテ』は1924年から1926年までに全5集が発行された。本稿では、そのうちの『クラルテ』の創刊号を分析するとともに、関連文献や論文などを具体的に見ていく。『クラルテ』の創刊号はその役割と象徴性だけでなく創刊背景や方向性、参加した人物(発行人、同人など)、主要内容および意義などが把握でき、創刊号が持つ意味は特別だと言える。そして、多喜二の文学思想の理解にも重要な資料である。

文芸雑誌『クラルテ』の創刊号は1924年4月に発行された。この時期は多喜二が小樽商業高等学校卒業(1924.3.9.)後、北海道の拓殖銀行札幌本店に就職し(1924.3.10)、小樽支店で勤務(1924.4.18)している時である。当時、多喜二は科学的社会主義に関する勉強も開始し(「社会科学研究会」、1927)、マルクス主義の思想を持ち弱者に対する共感が強化され、それが多喜二を行動的にも文学的にも大きく前進させる原動力となった。さらに、人道主義からマ

* 本研究は2019年日韓文化交流基金のフェローシップ(研究者支援コース)を受けた成果による論文である。

** 済州大学 日語日文学科 講師

ルクス主義に転換した多喜二は近代資本主義社会の様々な問題に関心を持つようになり、労働者の争議支援などにも関与していく。そして、1929年11月16日には依願退職で銀行を辞めるが、事実上解雇に他ならなかった。

文芸雑誌『クラルテ』に関する具体的な内容は韓国ではあまり知られていないため、詳細な調査も重要である。文芸雑誌『クラルテ』には多喜二だけでなく創刊に参加した島田正策を含め、10人の同人たちがいた。創刊号には片岡亮一、平沢哲夫、戸塚新太郎、新宮正辰、石倉雅一、夢野亮一、間司つねみ、島田青砂克の作品が収録されている。多喜二はクラルテ運動を日本に紹介した小牧近江(1894-1978)にも創刊号の原稿をお願いしたが、2輯目から原稿を投稿するという回答を受けた。

本研究は、これまでの先行研究では見られなかった文芸雑誌『クラルテ』に対する疎外された分野の研究として、多喜二が創刊に深く関与した文芸雑誌『クラルテ』の中の活動を基に、彼の活動だけでなく、プロ文学作家たちの実状をより現実感を持って考察する。近代日本の知識世界で先駆的な役割を果たした人物たちが雑誌という媒体を通じて自分たちの信念と思想を公的な談論に転換する過程を探る作業にもなるだろう。特に文芸雑誌『クラルテ』の創刊号の中で見られる多喜二と同人たちの文章は、当時の帝国主義日本の現実と社会像、そして彼らと関係を結んだ文人と文壇の雰囲気を実事と体験という形でそのまま伝えており、日本帝国主義政策の屈折した社会の現実と文壇の状況がうかがえるものである。

また、他の雑誌とは性格を異にする文芸雑誌『クラルテ』の中に見られる談論は、当時の社会像をどのような方法で反映し、その痕跡が今日どのように解釈され受け入れられているのか、その実態的な意味にアプローチできる資料として意味があると考えている。

2. 先行研究

文芸雑誌『クラルテ』は、日本の近代を理解するために重要な資料であるにもかかわらず、いまだに韓国での研究は見当たらない。文芸雑誌『クラルテ』のみならず、その中に掲載された作品、周辺的な内容についての研究も見逃されてきた。

今まで文芸雑誌『クラルテ』と関連した先行研究を見ると、韓国の場合、日本のプロレタリアと軍国主義の武力行為に抵抗した文学家に関する研究(李修京、「軍国主義の武力行為に抵抗した文学青年考察」、『アジア文化研究17』、2009)で、クラルテ思想と多喜二を論じ

る上で文芸雑誌『クラルテ』のタイトルがやっと話題に上っている程度である。日本のプロ文学を代表する作家である多喜二の韓国での研究は、彼の文壇の位置を考慮すると決して多いとは言えないだろう。そして、これまでは主に限定されたテキスト(『蟹工船』(1929)、『防雪林』(1928)、『一九二八・三・一五』(1928))の中で歴史的、思想的研究に焦点が当てられ進められてきた。また、多喜二の時代認識(黄奉模、『小林多喜二文学の書誌的研究』、語文学士、2011)やプロ文学運動(朴眞秀、「小林多喜二の『一九二八・一・一五』とプロレタリア・リアリズム論」、『日本学報57』、2003)を中心に時代的、歴史的背景とともに考察されてきた。しかし、文芸雑誌『クラルテ』の研究は日本の近代文学において歴史的な価値があるにもかかわらず、疎外された分野として議論すら行われていない。文芸雑誌『クラルテ』は日本のプロ文学を代表する作家、多喜二と創刊同人たちの本来の姿が生き生きと現れた小品を掲載した貴重な資料である。これを詳しく検討することは、創刊同人たちの実状をより現実感をもって統合的に見る作業になり得るため、今後本格的な研究が必要だと考える。

日本の場合、多喜二に関する資料や文献、新聞、雑誌などの基礎資料が韓国より多く残っており、研究も活発に行われている。しかし、研究対象が作家の多喜二や彼の作品、クラルテ運動と精神などに関する研究と著書が大半であり、文芸雑誌『クラルテ』に関する研究はほとんど行われていない。文芸雑誌『クラルテ』に掲載された多喜二の作品を一番に評したのは志賀直哉である。志賀直哉は「こうすればこうなるという常識的なものだ」¹⁾と批判した。そして、当時小樽新聞記者であった米山可津美も「クラルテの作品には、殆どこうすればこうなる式の常識的なものばかりだ」²⁾と志賀直哉と同じく酷評している。

木原直彦は『『クラルテ』-小林多喜二の青春』³⁾で小林多喜二と文芸雑誌『クラルテ』を中心に小林多喜二の学生時代の文学活動から特に文芸雑誌『クラルテ』の活動像をまとめている。木原直彦は「多喜二にとって、『クラルテ』は欠くことのできない文学修業の舞台であった。そしてそれは多喜二の青春でもあった」⁴⁾と言った。代表的な著書としては、安西育郎・李修京の『クラルテ運動と『種蒔く人』-反戦文学運動「クラルテ」の日本と朝鮮の展開』⁵⁾がある。これまでみてきた国内外の従来の研究は、限られたテキストの中で主に多喜二の時代精神に焦点が当てられ、歴史的、思想的評価を中心に画一的で断片的に行われてきた。

1) 島田正策(1990)『『クラルテ』の思い出』『本郷だより』第18号、不二出版、p.3

2) 同上論文、p.3

3) 木原直彦(1990)『『クラルテ』-小林多喜二の青春』『本郷だより』第18号、不二出版、pp.4-8

4) 同上論文、p.7

5) 安西育郎・李修京(2000)『クラルテ運動と『種蒔く人』-反戦文学運動「クラルテ」の日本と朝鮮の展開』』御茶の水書房、pp.3-234

3. クラルテ運動と小林多喜二

文芸雑誌『クラルテ』を理解するためには、西欧社会で展開されたクラルテ思想は欠かせない。その作業の一環として、フランスの作家アンリ・バルビュス(Barbusse Henri、1873-1935)のクラルテ運動とその影響、そして日本でのクラルテ運動の収容についてよく考える必要がある。

クラルテ運動とは、第1次世界大戦直後、フランス参戦軍人とアンリ・バルビュスなどの作家たちが戦争に反対しなければならないという姿勢を実践的行動で表現した国際的な反戦平和文学運動をいう。特に、戦争に参戦し最前線で戦って体を負傷した作家アンリ・バルビュスは、従軍の体験を書いた小説『砲火(Le Feu)』(1916)を発表して戦場の実態を告発した。この作品でフランス最高の文学賞である「コンクール賞(Prix Goncourt)」を受賞することになる。その後、続編で小説『クラルテ(clarte)』(1919)を発表する。この小説の主人公シモン・ポーランは、社会悪や貧富の差があるのは当然だと考える平凡な工場事務員である。

しかし、第1次世界大戦中にシモン・ポーランは兵士として戦場に行くことになる。戦場から帰って来た後、彼は惨めで過酷な戦争体験を通じて戦争悪を告発し、社会の不条理や階級制度を懐疑の目で見ようになる。そして、真面目に生きる苦しさを目覚め、後には人生と真理のクラルテ(=光、光明、希望)を追求するという内容である。アンリ・バルビュスは小説『クラルテ』で帝国主義、差別、階級、搾取などを排撃し、ロマン・ロラン(Romain Rolland、1866-1944)、ハーバート・ジョージ・ウェルズ(Herbert George Wells、1866-1946)、シュテファン・ツバイク(Stefan Zweig、1881-1942)、アナトール・フランス(Anatole France、1844-1924)らとともに反戦運動とインターナショナルをスローガンに、いわゆる「クラルテ運動」を実践しようとした。この時期は共産主義国際連合のコミンテルン(Comintern、第3インターナショナル)が結成された時期でもある。

日本にクラルテ運動を紹介したのは小牧近江である。小牧近江は1910年にブリュッセルで開催した第1回万国議員会議に出席する秋田県衆議院議員だった父親に伴って、フランスに渡った。パリ大学法学部を卒業(1918)後、フランス滞在中にアンリ・バルビュスが提唱したクラルテ運動に参加したこともあった。クラルテ運動は1923年にアンリ・バルビュスとロマン・ロランの論争を通じて世界的に有名になった。この論争でアンリ・バルビュスは、平和と真理を愛するなら、現実的な社会革命が必要だという実際主義的な主張をし、ロマン・ロランは自由主義の立場で精神の高貴さ、芸術の高貴さを力説する観念主義的主

張をした。この二人の論争は、当時フランスに留学していた小牧近江が日本に帰国後、雑誌『種蒔く人』(1921)⁶⁾を刊行し紹介して知られるようになった。小牧近江は『種蒔く人』を中心にアンリ・バルビュスの思想を実現し、『種蒔く人』は反戦平和、人道主義的改革思想を基調にして1921年から1923年にわたって刊行された。『種蒔く人』の刊行は小牧近江が反戦運動である「クラルテ運動」の火種を日本に撒く趣旨によるものだった。さらに、多喜二も「クラルテ運動」の先駆者としてこれに共感し、「クラルテ運動」を实践しようとして小樽で文芸雑誌『クラルテ』を刊行した。すなわち、文芸雑誌『クラルテ』はアンリ・バルビュスの「クラルテ運動」の影響を受けたものと言える。当時、多喜二は帝国主義の日本の社会像と日本の文壇が置かれていた現実を目の当たりにしながら活動していた。そして、彼の目で眺めた日本の社会像と日本の文壇、文人の現実認識を文芸雑誌『クラルテ』を通じて述べたのである。

4. 創刊号『クラルテ』と小林多喜二

文芸雑誌『クラルテ』の創刊は小林多喜二が小樽高等商科学学校の在学中から企画・編集しており、1924年、北海道の拓殖銀行に入ると同時に刊行した。この時から多くの小説を本格的に書き始め、社会主義的な思想に心酔するようになる。文芸雑誌『クラルテ』は多喜二が主宰し、雑誌の標題も多喜二が名付けた。雑誌の編集人はすべて多喜二になっており、発行所も多喜二のクラルテ社(小樽市若竹町18番地)になっている。これは多喜二が中心となって雑誌を発行したからでもあるが、当時の日本の社会の現実における思想の弾圧と関連する外部圧力とも無関係ではなさそうである。

雑誌の創刊背景について武田暹は「小林多喜二は自由になんでも書ける自分の雑誌が欲しくなったにちがいない。率直に言う、銀行員は食うための手段で、小林は年来のひそかな希望であった文学生活を『クラルテ』で踏み切ったのであった」⁷⁾と言う。そして、島田正策は「拓殖銀行に就職すると多喜二はまた同人誌を出そうと言い出した。当時小樽では

6) 日本の社会主義文学史上の「プロレタリア文学とその運動の始まり」と言われる『種蒔く人』が、1921(大正10)年2月に創刊された。小牧近江が中心となり、有島武郎の財政的援助により出された左翼文化・文学総合雑誌であった。これを指標として「プロレタリア」文学は運動として展開され始め、日本プロレタリア作家同盟(ナッポ)の解散(1924年)によって運動として終止符が打たれた。(倉田稔(2003)『小林多喜二伝』論創社、p.154)

7) 武田 暹(1974)『『クラルテ』時代』『小林多喜二読本』、啓隆閣、p.245

『群像』『原始林』『新樹』その他数誌に及ぶものが発行されていた。でも他の雑誌は内容的には貧弱なものばかりだったので、多喜二は出すからには断然立派なものにしたいと考えていた⁸⁾と、当時の雑誌発行での抱負を回想した。

創刊号の同人は多喜二をはじめとして、片岡亮一(当時庁商を小林多喜二と一緒に卒業し、百十三銀行小樽支店を経て小樽高商勤務、短歌)、島田正策(小樽高商1年先輩)、蒔田栄一(小林多喜二と同期で東京外国語学校を出て、小樽高商の講師、英詩の訳文など)、斎藤次郎(=斎藤未知二、小林多喜二と庁商同期で百十三銀行小樽支店勤務)、平沢哲夫(詩)、戸塚新太郎(小樽中学出、短歌)、新宮正辰(小樽中学出、一二銀行小樽支店勤務)、宇野長作(小樽高商同期、詩)と全部で9人だったが、第2輯からは武田暹(『群像』の主催者の一人で小林多喜二が『群像』に投稿したことがあるが、武田暹が没にした)が加わって10人になった。⁹⁾ 同人たちはほとんど多喜二と同じ中・高校の出身か、社会で繋がりを持った人々で構成されている。その中で島田正策、蒔田栄一、片岡亮一、斎藤次郎らとは1920年4月の回覧文集『素描』を創刊し、11月頃までに7集を発行したこともある。では、文芸雑誌名をなぜ「クラルテ」にしたのか。編集人である小林多喜二は、最初は雑誌の標題を「断層」にしようとしたが、最終的には『クラルテ』に決めた。その理由は、アンリ・バルビュスの小説『クラルテ』を読んで感動したのが主な動機ではないかと考える。

次は、創刊号の扉に載せたアンリ・バルビュスの引用文である。

さうだ、此の世には一つの神が存在する。
吾々の廣大な内的生命を導引くためには
また、全人類の生命のうちに含まれてゐる分担を導引くためには
決してそれから眼を外らしてはならない一つの神が存在する。
眞理という神だ。

-アンリ・バルビュス「クラルテ」より、『クラルテ第1輯』-

文芸雑誌『クラルテ』にはアンリ・バルビュスの文章だけでなく、トルストイの文章など自分たちが追求する文学思想と同様の内容を引用している。そして多喜二は上記のアンリ・バルビュスの文を雑誌だけでなく、自分の小樽高等商業学校の卒業論文¹⁰⁾の表紙にも

8) 倉田 稔(2003)『小林多喜二伝』論創社、p.287

9) 倉田 稔(1995)「小林多喜二と拓銀就職」『人文研究』第39輯、p.58

10) 小林多喜二が卒業論文(「見捨てられたひと」と「パンの征服」及びそれに対する附言)の「扉」に記したのは、次の文言である。「神は存在しない.....然し、否。此世にはたった一つの神が存在する。人類

引用するほど小説『クラルテ』で述べた理想を真理として規定していたことが推測できる。アンリ・バルビュスが主張したのは、平和と真理を愛するなら実際的な社会革命が必要だということであった。それを多喜二を含む創刊同人たちは文芸雑誌『クラルテ』を中心に実現しようとした。つまり、創刊号で西洋の知識人の口を借りて、同人たちの問題意識と文芸雑誌『クラルテ』の創刊の意義を固めたのであった。

多喜二は『クラルテ』について、次のように宣言した。

“内部における純な創造的感情は、外部へは最もそれと適合したものを求める。然しそれが適合しない時には、その既成のものに対して不満と反抗が起らなければならない。『クラルテ』が仲間同志の精神の創作化であり、と同時に、バヤバヤ雑誌 芸術の撲滅者でもあったわけである。これ以外に、『クラルテ』の宣言はあり得ない。そしてこの具体的説明は『クラルテ』の内容、そのものが示していることであろう”¹¹⁾

それでは文芸雑誌『クラルテ』で追求した「真理」とは何であろうか。それは真実を通じて目覚めその悟りを世間に知らせることである。神は真理であり、その真理は光と光明であり、希望である。文芸雑誌『クラルテ』の同人たちの「クラルテ運動」の実践は、ひた向きに文学を手段として帝国主義、戦争、権力、労働搾取などに抵抗することであった。狭小な文学テキスト空間の中で、彼らだけの方法で実践したのが文芸雑誌『クラルテ』に表れていると言える。

文芸雑誌『クラルテ』の創刊は、多喜二が1924年の北海道拓殖銀行に勤務しているときだった。文芸雑誌『クラルテ』に関する具体的な内容は韓国ではあまり知られていないため、詳細な調査も重要であり、多喜二だけでなく文芸雑誌『クラルテ』の創刊に参加した同人や彼らが残した小説や詩、短歌、談論なども併せて見る必要がある。これは、近代の日本の知識世界で先駆的な役割を果たした人物が雑誌という媒体を通じて自分たちの信念と思想を公的な談論に転換する過程を探る作業である。

次の<表1>は文芸雑誌『クラルテ』の創刊号に収録された作品をまとめたものである。

がその生を正当に導くためには、この秩序を秩序であらしめるためには、断じてそれから眼を外してはならない唯一の神が存在する。それは「真理」と呼ぶ神である。-アンリ・バルビュス「クラルテ」より- (小林多喜二(1982)『小林多喜二全集』第六巻、p.300)

11) 木原直彦(1976)『北海道文学史』北海道新聞社、p.110

<表1> 文芸雑誌『クラルテ』

	時 期	作 家	題 目	ジャンル
第1輯 (創刊号)	1924.4	新宮正辰	明るきかげ	小説
		小林多喜二	暴風雨もよひ	小説
		小林多喜二	赤い部屋	小説
		石倉雅一	如月の歌	短歌
		戸塚新太郎	小庭スケッチ	短歌
		片岡亮一	曇に暮るる	短歌
		夢野亮一	青桐の天暮の下で	詩
		間司つねみ	白き夜鶯	詩
		平沢哲夫	冬夜圓舞	詩
		島田青砂克	賢吉の憂鬱	小説
		平沢哲夫 島田青砂克 小林多喜二	同人雑記	後書

文芸雑誌『クラルテ』の創刊号は表紙まで合わせて総36ページで構成されている。創刊号は1924年4月に刊行されたが、1925年に公布された治安維持法の思想弾圧による外部の圧力と経済的窮乏によって1926年に刊行した5輯目を最後に終刊された。

文芸雑誌『クラルテ』の創刊号を目次順にみると、まず最初に、新宮正辰の作品『明るきかげ』が収録されている。『明るきかげ』は恋愛への願いの空しさを描いている。小樽に似た街のイギリス人家でダンス教室が週二回開かれ、若い男女が多く集まるようになる。そして<私>があこがれていた初恋の人によく似た娘がそのイギリス人と抱き合うようにして夜歩いているのを見るという淡くほろ若い青春の物語である。

これについて布野栄一は「日本の当時の社会で自由な恋愛の場がなかったことを、小林多喜二は結果として指摘していることになるうか。教会でなく、もっと民衆的な開かれた場で自由な恋愛が成り立つことを、同人誌『クラルテ』に集まった若い文学志望の青年たちは求めていたと言えよう」¹²⁾と言う。

次に、多喜二の『暴風雨もよひ』と『赤い部屋』が収録されている。創刊号には唯一多喜二だけが二つの作品を収録しており、編集人、発行先なども多喜二が中心となって進められている。多喜二の小説『暴風雨もよひ』はS教授の妻への恨みつらみを描いており、地の文が

12) 小林多喜二(1990)「解説—『クラルテ』と「クラルテ運動」」『社会文学雑誌叢書⑨クラルテ第1輯～第5輯』不二出版、p.6

少なく直接に語る部分が多いという形式と相まって、その主題はアントン・パヴロヴィチ・チェーホフ(Anton Pavlovich Chekhov, 1860-1904)の「煙草の害について」(1886)を連想させる¹³⁾と評されている。

文芸雑誌『クラルテ』で多喜二が積極的に書いたのは『赤い部屋』である。『赤い部屋』はヨハン・アウグスト・ストリンドベリ(Johan August Strindberg, 1849-1912)の同名の小説から取ったもので、多喜二は初め卒業論文をストリンドベルグにしようとするほど関心を示していた。ストリンドベルグの『赤い部屋』では、北の国スウェーデンの港町の酒場「赤い部屋」に毎晩集まる芸術家や文士、ジャーナリスト、官吏などが19世紀末的な雰囲気をかもし出していた。虚偽と真実、正義と欺瞞の対立、生への魂の強烈な叫び、それらに我々のロマンチックな幻想が結びついていて、ストックホルムの町はどこか小樽に似たところが、もちろん雪国のような港があるというくらいのことかもしれないが、何とか小樽にも『赤い部屋』のような雰囲気をつくりたいものだ、という欲求がどこかにあったのだと考えられる。¹⁴⁾『赤い部屋』は1輯から5輯まで続いて掲載し、多喜二は『赤い部屋』について「赤い部屋とは、自由ということである。真理の追求ということである。過去に於ける偶像を破壊するということである。人真似をしないという事である。根底のある真理をわめくということである。正義をもって如何なるものにも刃向かうということである」¹⁵⁾と明確に言った。つまり、小説『赤い部屋』は多喜二がクラルテ運動を意識して書いた作品だと言える。

このように創刊号では多喜二の色彩が目立った特徴を見せているが、2輯から終刊までを見ると他の同人たちの作品も多く収録し、視野を拡大して客観性を確保している。創刊号の最後の32ページには雑誌の後記を残した。後記は、平沢哲夫、島田青砂克、多喜二が務めている。創刊号は何よりも文学関連の内容が占める比重が少ないと言える。前にも言ったが、創刊後記と目次、広報物などを除いて30ページ程度の分量である。その中で小説4篇が22ページに該当し、詩が6篇で8ページを占めている。多喜二は自由に何でも書ける自分たちだけの雑誌が必要なだけであったため、文学的内容から見ると貧弱な部分もある。しかし、多喜二は文芸雑誌『クラルテ』の創刊と文筆活動を通じて日本の帝国主義政策の屈折した社会の現実を語ろうとした。当時、日本社会で文学を手段として自分たちだけの信念と思想を持ち、その時代の精神に抵抗するために創刊された文芸雑誌『クラルテ』は、他の雑誌とは違って「反戦、反軍国主義、帝国主義、労働運動」などをキーワードにした雑誌

13) 右遠俊郎(2008)『小林多喜二私論』本の泉社、p.131

14) 倉田 稔(2003)『小林多喜二伝』論創社、p.403

15) 木原直彦(1990)『『クラルテ』—小林多喜二の青春』『本郷だより』第18号、不二出版、p.6

で、このような点が最も重要な特徴であり、注目すべき部分だと言える。また、多喜二は文芸雑誌『クラルテ』を通じて、これから進むべき方向と目標を明確にしながらも、大衆的な雑誌の発刊を通じてクラルテ運動の精神を知らせるために多くの力を注いだことが分かる。

5. おわりに

これまで文芸雑誌『クラルテ』の創刊号と同人小林多喜二を中心に見てきた。文芸雑誌『クラルテ』はタイトル通り、アンリ・バルビュスのクラルテ運動の刺激、影響の色が濃い文芸雑誌であり、多喜二をはじめ創刊同人たちは文芸雑誌『クラルテ』を通じて、アンリ・バルビュスの思想を実現しようとした。特に創刊号では、アンリ・バルビュスの言葉を借りて、同人たちの問題意識と文芸雑誌『クラルテ』の創刊意義を確固たるものにしている。このように創刊号では創刊背景や方向性、主要内容および意義などが把握できるため、創刊号の持つ意味は特別なものであると言える。また、文芸雑誌『クラルテ』創刊号の中の文筆活動に基づき、当時の日本の現実と社会像、そして、彼らと関係を結んでいる文人と文壇の雰囲気を理解するのに一次的な資料として意味を持っている。

文芸雑誌『クラルテ』で追求した真理は、真実を通じて目覚めその悟りを世界に知らせるものであった。神は真理であり、その真理は光と光明であり、希望である。文芸雑誌『クラルテ』の同人たちは、クラルテ運動を実践できる手段は文学であるとし、自分たちだけの信念と思想を持ってその時代の精神に抵抗した。狭小な文学テキストの空間の中で、彼らだけの方法で実践したのが文芸雑誌『クラルテ』の中に表れていると言える。

【参考文献】

- 安斎育郎・李修京(2000)『クラルテ運動と『種蒔く人』』御茶の水書房、pp.3-234
 右遠俊郎(2008)『小林多喜二私論』本の泉社、p.131
 倉田 稔(1995)『小林多喜二 と拓銀就職』『人文研究』第89輯、p.5
 _____(2003)『小林多喜二伝』論創社、p.154、p.287、p.403
 木原直彦(1976)『北海道文学史』北海道新聞社、p.110
 _____(1990)『『クラルテ』 - 小林多喜二の青春』不二出版、pp.4-8

島田政策(1990)『『クラルテ』の思い出』不二出版、p.3

小林多喜二(1993)『小林多喜二全集 6巻』新日本出版社、p.300

_____ (1990)『社会文学雑誌叢書⑨クラルテ第1輯』不二出版、pp.1-32

武田 暹(1974)『『クラルテ』時代』『小林多喜二読本』啓隆閣、p.245

논문투고일 : 2021년 06월 10일
심사개시일 : 2021년 07월 14일
1차 수정일 : 2021년 08월 05일
2차 수정일 : 2021년 08월 13일
게재확정일 : 2021년 08월 20일

 <要旨>

文芸雑誌『クラルテ』創刊号研究

- 小林多喜二の作品を中心に -

金大洋

本研究は北海道の小樽で発行された文芸雑誌『クラルテ』の創刊号と同人小林多喜二(1903-1933)の作品を中心に見てきた。文芸雑誌『クラルテ』はタイトルの通りアンリ・バルビュスのクラルテ運動の刺激、影響の色が濃い文芸雑誌であり、小林多喜二をはじめ創刊同人たちは文芸雑誌『クラルテ』を通じて、アンリ・バルビュスの思想を実現しようとした。文芸雑誌『クラルテ』で追求した真理は、真実を通じて目覚めその悟りを世界に知らせるものであった。神は真理であり、その真理は光と光明であり、希望であった。世界に知らせるには狭いものであるが、文学テキスト空間の中で、自分たちのやり方で実践できるものが必要であった。そして、文芸雑誌『クラルテ』の創刊と、そこでの文筆活動を通じて、日本帝国主義政策の屈折した社会現実を語ろうとした。さらに、当時の日本社会の時代精神に抵抗して、これから進むべき方向と目標を明確にし、クラルテ運動の精神を呼び覚ますことに力を注いだ。

Research on the first issue of literary magazine 『Clar-te』

- Focusing on the literary works of Takiji Kobayashi -

Kim, Dae-Yang

This research focuses on examining 『Clar-te(クラルテ)』 and the literary works of Takiji Kobayashi(小林多喜二, 1903-1933). Literary magazine 『Clar-te』, like its name, was heavily influenced by the Clar-te movement led by Henri Barbusse, and the members who first published the magazine aimed to accomplish Henri Barbusse's ideology in real-world through 『Clar-te』.

The essence pursued in the literary magazine 『Clar-te』 was to enlighten through the truth and to promote insight throughout the world. God is the truth, and the truth is light and enlightenment as well as hope. In order to enlighten the world, they needed to practice their ideology in their own method in a literary textual space of magazine, even though it is narrow and limited. Through the establishment of 『Clar-te』 and writing projects, they attempted to tell the distorted reality of Japanese imperialistic policies. Furthermore, resisting the zeitgeist of Japanese society, they solidified the direction and goal and devoted to awakening the spirit of the Clar-te movement.